

I 男声合唱組曲 「尾崎喜八の詩から」 尾崎 喜八 作詩 多田 武彦 作曲

この組曲は、尾崎喜八（1892-1974）の詩に、多田武彦が作曲した作品で、関西学院グリークラブからの委嘱曲（1974年初演）だった。尾崎喜八は戦後7年間、長野県に居を構えていたこともあり、自身も山歩きをし、自然と山岳を主題とした詩を数多く残した。この組曲は多田武彦が尾崎喜八の詩集「花咲ける孤独」の2篇の詩を核として、他の詩集から4篇を選び出した。山々の四季を意識し、その自然の移り変わりが感じられ、喜八の心情とともに立体的に表現されている作品である。喜八は銀行家、翻訳家、随筆家を経て詩を描くようになったが、音楽にも造詣が深かった。草野心平や高村光太郎とも時代が重なり、彼らとの関係の中で独特な作風が育まれたと考えられる。その特徴として三好達治は、喜八作品は口語自由詩の完成度にあると言っていた。

I 冬野 詩集「花咲ける孤独」より

「花咲ける孤独」は1955年に出版され、中には64の詩が含まれている。今回の合唱にはこの詩集の中の「冬野」を始めに、「かけす」を終わりに、間に4つの詩を組み込み、この組み合わせにより冬～秋までの雄大な景と心情を詠い上げた。

冬野である広大な畑地（現在の千葉県三里塚あたりのようだ）に夕暮れが懸ると、畝に霜が結び、琵琶をかき鳴らすような風の高い音が響き渡る。その天地の間に古代からの恵みの躍動が聞こえてくる。春はまだ先だが、予感はずで揺らめいている。・・・この暮れゆく晚い土を踏んで、喜八自らがこの大地に麦の種を播き（精神的な意味も含めて）、自然と共に生きる。そして、穫り入れの時には燃える翡翠色の海のような 六月を迎えることになるのだろう。

II 最後の雪に 詩集「高層雲の下」より

「高層雲の下」は1924年に出版され、42の詩が含まれている。1950-51年には中学三年生の教科書にも採用された。

詩の内容は、田舎のわが家の窓ガラスの前で、冬の終わりを告げる水気が多い牡丹雪が白いワルツを踊りながらやって来る。雪は周りの野に藪に畠に路に、そして、私の窓の前に降り注いでいる。どうか私の詩に高貴さを加えてくれ。・・・やがて、微風と雲雀を伴い、遠い地平から輝く春がやって来る。

III 春愁 詩集「その後の詩帖から」より

副題に～ゆくりなく八木重吉の詩碑の立つ田舎を通過して、とある。山歩きをしていて田舎道で見つけた詩碑は、偶然にも29歳と若くして亡くなった八木重吉の生家の前にあった。その時、喜八は67歳。幸いにして自身は、老いを経験できているし、「賢さ」や「澄み晴れた成熟」の境地に至っている。しかし、思い返すと青春の燃える愛や衝動や仕事への奮闘・・・それらがうまくみ合わなかったものだ。今の賢さや成熟があればと悔やむしかない。ふと周りを見渡すと春が始まる時。梅花匂う田舎、赤々とした夕日、谷間の宵の明星などから人生を振り返ることになったのも、一つの春愁なのだろう。

多田武彦（1930-2017）は京都大学在学中に男声合唱団の指揮者として活躍した。当時、知遇を得た清水脩に作曲の助言を得ていた。清水脩と共に日本の男声合唱の基盤を築いた音楽家である。代表作として、北原白秋の詩から「柳河風俗詩」、草野心平の詩から「富士山」を筆頭に、雨をテーマにした各詩人の作品を集め男声合唱組曲の代表作「雨」も発表した。「多田武彦男声合唱曲集」は、1～8まで刊行され、日本の男声合唱の集大成化を行った類まれな存在である。小田原男声合唱団とは、「西湖の風雅」「冨寒小景（ごかんしょうけい）」「達治の旅情」「大木惇夫の詩から一四季点綴（しきてんてい）」などの委嘱曲の作曲依頼や客演指揮者をお願いするなど関係が深かった。

IV 天上沢 詩集「旅と滞在」より

「旅と滞在」は1933年に出版された。山の詩人とも言われた喜八の40歳ごろの作品であり、「人生とは、この世での滞在であり、それぞれの旅でもある」ことを表現したものだ。

詩中にある「みすず刈る」の「すず」は篠竹のことで、全体では 信濃に懸る枕詞である。「こごしき」とは「岩がごつごつと重く険しい」と言う意味である。

信濃の国の大いなる夏。山々のたたずまい、谷々の姿はもとに変わることはない。夏になると安曇野には雲、槍穂高には日が照り、そしてまた曇り、砂には松、岩には岩雲雀。・・・燕（つばくろ）より西岳へと案内の若者に連れられ、老人一人がついて行く・・・。

V 牧場 詩集「高原詩抄」より

「ばくじょう」ではなく「まきば」と読む。「高原詩抄」は1942年に出版された詩集で、4月には米軍機による東京初空襲、6月にはミッドウエー海戦の敗北、8月米軍がガナルカナル上陸という惨状の中で喜八の詩の内容とは裏腹な現実の中での出版である。

大自然の中の広々とした景色の中で、牛が青草を食べ、ゆったりと放牧されている。しかし、時代を考えるとその表現された内容は異なる意味を持つのかも知れない。・・・夏も終る頃、白雲が峠を越え、牛らは目を上げて雲の行衛（ゆくえ）を眺めている。やがて風が立ち、夕日の光が流れ、風に送られ日を浴びて牛は牧場を下る。

VI かけす 詩集「花咲ける孤独」より

I 冬野に述べた同じ詩集から採用され、秋の冷たい様をかけすの姿から詠いあげた。かけすは、鳥綱スズメ目カラス科カケス属の鳥で体長30センチぐらい。

八ヶ岳の裾野に広がる富士見高原に住んでいた頃の詩であろう。当時の心情を かけすの姿として追っていた作品である。かけすと言う仮の名も人間との地上の契りの夢だったと、今は懐かしく、柔らかく思う・・・深まる秋の冷たい空の海にもうほとんど消えて行く。

冬から始まった曲が、秋で締めくくられている。

（解説：B1中村 敬、参考：B1伊東 清邦＜故人＞）

小田原男声合唱団第53回定期演奏会 2024年12月を予定

I 冬野

いま 野には
大きな豎琴のような夕暮れが懸かる。
厳肅に切られた畝(うね)から畝(うね)へ霜がむすび、
風の長い琵琶音(はおん)がはしり、
最初の白い星がひとつ
もっとも高い鍵(けん)を打つ。
冬は古代のようにひろびろと枯れ、
春はまだ遙かだが
予感はずでに天地の間(かん)にゆらめいている。

わたしはこの暮れゆく晩(おそ)い土をふんで
わたしの手から種子を播く、
夕日のようにみなぎって
信頼のために重い種子を。
それは沈む、
深く仕えるもののように、
地底の夜々を変貌して
おもむろに遠い黎明(れいめい)をあかるむために。
きよらかな、澄んだ凝縮が感じられる。
ただ周囲の蒼然たる沈黙のなかで
わたしの心が敬虔な讃歌だ。
そしてもう聴いている、
とりいれの野が祭のような、
燃える正午が翡翠(かわせみ)いろの
海のような六月を・・・・・・

II 最後の雪に

田舎のわが家の窓硝子の前で
冬のおわりの花びらの雪、
高雅な、憂鬱は老嬢たちが
朝から白いワルツを踊っている。
その窓に近い机にむかって
私の書く光明の詩、
早春の夕がた、透明な運河の
水や船や労働を織りこんだ生気の詩。

雪よ、野に藪に、畠に路(みち)に、
そして私の窓の前、
お前たちの踊る典雅なウインナ・ワルツの
その高貴さを私の詩に加えてくれ。

やがて遠い地平から輝く春が
微風と雲雀とのその前駆を送るとき、
古い詩稿に私は愛を感じるだろう、
お前たち、高雅な憂鬱な老嬢たちの
窓の前であの最後の舞踏のため、
私の内でいつも楽しい記念のため。

III 春愁

一ゆくりなく八木重吉の詩碑の立つ田舎を通過

静かに賢く老いるということは
満ちてくつろいだ願わしい境地だ、
今日しも春がはじまったという
木々の芽立ちと若草の岡のなぞえに
赤々と光たゆたう夕日のように。
だが自分にもあった青春の
燃える愛や衝動や仕事への奮闘、
その得意と蹉跎の年々(としとし)に
この賢さ、この澄み晴れた成熟の
ついに間に合わなかったことが悔やまれる。

ふたたび春のはじまる時、
もう梅の田舎の夕日の色や
暫しを照らす谷間の宵の明星に
遠く来た人生とおのが青春を惜しむということ、
これをしもまた一つの春愁というべきであろうか。

IV 天上沢(てんじょうさわ)

みすず刈る信濃の国のおおいなる夏、
山々のたたずまい、谷々の姿もとに変わらず、
安曇野に雲立ちたぎり、槍穂高日は照り曇り、
砂に這う這松、岩にさえずる岩雲雀、
さてはおりの言葉すくなき登山者など、
ものなべて昔におなじ空のもと、
燕(つばくろ)より西岳へのごしきほとり、
案内の若者立たせ、老人ひとり、
追憶がまぶた濡らした水にうかんで
天上(てんじょう)の千筋の雪の彷彿たるを見つめていた。

V 牧場

山の牧場の 青草の 青草に
あまたの牛を はなちけり。
あまたの牛は ひろびろと
空の真下に 散りにけり。

夏もおわるか 白雲の
きょうも峠を こえて行く。
立ち臥す牛ら 眼を上げて
雲の行衛(ゆくえ)を ながめけり。

山の牧場に 風立ちて
夕日の光 ながれけり。
風に送られ 日を浴びて
牛は牧場を くだりけり。

VI かけす

山国の空のあんな高いところを
二羽三羽 五羽六羽と
かけすの鳥のとんで行くのがじつに秋だ
あんなに半ば透きとおる
ときどきはちらちら光り
空気の波をおもたくわけて
もう二度と帰って来ない者のように
かけすという仮の名も
人間との地上の契りの夢だったと
今はなつかしく 柔らかに
おりおりはたぶん低く啼きながら
ほのぼのと 暗み 明るみ
見る見るうちに小さくなり
深まる秋のあおくつめたい空の海に
もうほとんど消えてゆく・・・・・・